
放課後メサイア

紫野蒼紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後メサイア

【Nコード】

N9969Y

【作者名】

紫野蒼紅

【あらすじ】

救世主は果たして人を救うのか？

0..始

「よう、馬鹿野郎」

少年は、呆然としている彼の方を向き

「ほれ、突っ立っていいのか？」

右腕から発生していたと思わしき、紅く発光する電撃をふっ、と消す。足元には先ほどまで人間だった赤紫の死骸が黒い血溜まりの上に転がっていた。

何が特別と言うわけでもない田舎町の住宅街で、化け物が殺された。非自然的現状の真ん中にたつ彼は、とてつもなく浮世離れた風貌の少年。

半分から左が金髪、右が緑の黒髪。右目は白眼の部分が黒く、左目は虹彩が宝石のように紅い。

整った顔は、口の端をひきつらせるように妖しく笑う。

「転校生、君は…一体……何者なんだ？」

「私か？ そうだな、名前いがいいいうならば」

長い睫毛に縁取られた目が細められる

「私はメシア、偽装の輪たる世界を救済する者だ」

放課後のメサイア

00年度／『BADWorldbeHappy!』

仮想歴2000年、三年前に日本に落下した細かい石、通称月の石が未知の放射能を含んでいたことが、最近判った頃。

そしてその月の石に、大量に含まれる『ゼータ放射能』が人体に影響を与えることが分かり、学会は混乱し、世間で大いに話題になっていた頃のこと。

関東地方の北に位置する新妻市幽鬼ヶ原町。海と山に面するよく言えば自然溢れる、悪く言えば何もない：市街地から少し離れた田舎町だ。最近開発で住宅街ができたことを除けば本当に昔ながらの田園風景が広がっている。

そんな町で唯一ある中学校と言えば『上原中学校』だ。全校生徒は98人とかなり少ないのだが、どういうわけか校舎たる建物が校舎に見えないほど立派なモダン建築で、無駄に広い。その広さは在学中にすべての部屋を回れないほどである。

同時に、古い建物の中に一般人には良さがあまり分からない芸術的建築物はかなり浮いており、町でもかなり異質な場所となっている。

そして今日は上原中学校の新学期の日だ。

通学路で和気藹々と喋りながら登校する少年少女達。その中で一人、誰とも言葉を交わさずに歩いている少年がいる。

いちのみやういち
一之宮宇一、この春中学二年生になった少年だ。乱れ放題の灰色の髪の毛、成長途中の幼い顔立ちはまさしく年頃の少年らしいといえるだろう。何か上の空な彼の肩を、後ろ叩く手があった。

「よう！宇一、お早うさん」

「…啓司、元気そうだね」

「まあな。お前は相変わらず顔色悪いなあ！」

「余計なお世話」

背中をばしばしとはたく彼は、関西弁と標準語が混じった言葉遣いで宇一に話しかける。彼の名前は井戸啓司^{いどけいじ}。宇一の幼なじみで快活明朗なごく普通の少年だ。

少々小柄で、未だにぶかぶかな学ランが未成熟さを醸し出しているのだが、不思議と幼くは見えない。短めに切られたネコ毛の黒髪が身振り手振りに合わせるように揺れる。

「そんなんはどうでもいいとして、聞いたか？」

「何が？」

「転校生が来るって話。何でも帰国子女らしいで！」

「へえ……それはそれは…」

「あ、子女いうても男らしい、男。なんか残念や…」

「金髪で人形みたいな子が来るとか、期待してたの？」

どきっとしたように、首をぶんぶん横に振る。

「そんな事、ぜ、全然考えてないで?!」

「そう?」

本当は凶星な癖に、と宇一は思いながらからかうように微笑む。

「本当や! もう、女みたいなかにかい方しおって、意地悪!」

曲がり角をまがりながら、話の本筋に戻るように、それにしてもと啓司は続ける。

「まあそれはおいとくとしてな、その帰国子女、経歴はあの蜘蛛手のやつでもアメリカに住んでた事以外は一切不明、わくわくせえへん？」

蜘蛛手とはこの学校で随一の情報力をもつ、所謂《噂好き》の少年、蜘蛛手くもてむく六九のことである。どういう訳か啓司と六九は仲がいいらしく、六九経由の情報を宇一にあれこれ話してくる。宇一自身は六九とはあまり面識は無いのだが、そばかすが目立つひとだった、と言うことは覚えている。

「そいつは変だねえ」

「俺、何かそいつがすげえ曲者な気がするんやけど」

「やめてよ、本当にそうならどうするんだよ」

「その時はその時！」

そんな直感的中するとはつゆ知らず、彼らは桜が吹雪く学校へと入っていった。

「……………」

ネオン色の光が煌々と空間全体を照らし、幻想的に彩っている。天も地もなく、一本の柱だけが光に抱かれるようにそびえ立っていた。銀色に煌めく細い六本の棒と上へも無数に、下へも無数に折り重なるような六角形の水晶板の床で構成された非現実的なその柱は、時々淡く発光しながら静かに立っていた。

その柱の恐らく中間部分であろう水晶板の上で、薄汚れたローブを纏った金髪の男が神秘的な装飾が施された窓枠の向こう側を眺

めている。

その背中には一対の大きな猛禽類の翼がついている。まるで聖書に出てくる天使のような純白の翼。不自然なほど整った西洋人らしい顔には慈愛とも嘲笑ともとれる笑みが浮かんでいる。穏やかな、しかしどこか恐怖を覚える紺碧の目は、窓枠の向こう側に蜃気楼又はスクリーンのように映る映像を見ている。

映像には四色の髪 of 少年が電柱の上で立つ姿。少しすれば灰色の髪 of 少年が暇そうに欠伸をする姿。様々な少年少女をくると映していく。

一通り見終えた後、はあ、と待ちこがれるようなため息をはく。

「…此处から正念場です、ね。知恵比べだ。力が勝つか叡智が勝つか。私は行く末を見届けましょう」

窓枠の前から離れ、天を仰ぐ。無限と続くかのような闇の向こうを睨み付けるように。

退屈な始業式が終わり、皆クラスへともどっていく。同じクラスだったらしく、啓司が後ろから宇一の背を突つつく。

「なあ宇一、このクラスの人選に悪意を感じへんか？」

「悪意って、何が？」

「ホント宇一は他人に興味ないのな…」

呆れたようにため息をつく。

「まずな、あの市長さんとこのじゃじゃ馬娘がいるだろ、それだけでもまずヤバイ。」

「…ああ、三ツ矢さんの事か」

宇一は右斜め前の栗毛の少女を見る。この年にしてはかなり小柄で、外見に気を使っていないのか、寝癖が目立つ。声を潜めながら啓司は続ける。

「なんであんな怖いもの知らずなん？女と思いたくないわあ…」

「一応かわいいところもあるんだけどね」

「どこがやねん!？」

「冗談、喋ったこともないよ」

三ツ矢夕紀^{みつやゆうき}、幽鬼ヶ原市長、三ツ矢俊成の一人娘にして町内でも有名な暴力娘だ…と宇一は頭にしまってある情報を引っ張りだす。名前だけなら聞いたことはあった。確か一年のときに窓ガラスを壊し回り、先生達すら手に終えなかったという。そんな事を考えている間にも啓司の話は進む。

「蜘蛛手やろ、男食いの悪名高い桐島やろ、電波飛びまくりのメラン子やろ…」

「…上梨世宇子さんでしょ？」

「ああ、確かにそうやけど…」

桐島とは長い長い艶のある黒髪が印象的な少女で、本名は桐島咲^{きりしまさき}といった。

学校の男子生徒を次々と失意の底に沈めているという自他共に認める『男食い』らしい。夕紀と仲がいいらしく、しょっちゅう二人で行動しており、『ツインデビル』だとか『歩く双獅子』だとかいわれている。しかし宇一自身は彼女らとは今まで別のクラスだった為、そこまで面識はなかった。むしろ啓司に教えられるまで知らなかったのだ。

そして上梨世宇子^{かみなしようち}。彼女の事は宇一もよく知っている。靡くような乳白色の髪色にシアンブルーの大きな目。まるで漫画に出てくるかのような外見を一切裏切らないキテレツな発言と珍妙な行動。たびたび会話することがあったが、何となく伝わるようで肝心の中身が無く、本当に疲れたものだ。

「あの髪色は染めてんのか…？」

「さあ。本人曰く白髪じゃあないらしいけど。」

「ホンマか？お前アイツと仲良かったん？」

「さあ？」

ええっ、と啓司が何かを言いかけたとき、担任となる先生が声を大きくした。

「静かに！…えーはじめに自己紹介を。私はこのクラスを一年間担任することになった華原吾幸だ、よろしく」。

艶のない黒い髪が印象的な担任：華原吾幸^{かはらあゆき}は、軽く礼をする。美人とまではいかずとも、そこそこ顔立ちを整っている。むっ、と機嫌の悪そうな顔がいかに頑固そうだ、と宇一は思った。

「そして皆も分かっているかとおもうが、そこの席に転校生が入る。いまから転校生を呼んでくる」

《転校生》

その単語に宇一は妙な既視感を覚える。華原は手前のドアを開け、転校生に中に入るように指示する。期待という沈黙が教室を押し潰すなか、そいつは入ってきた。

「…どうも。」

転校生の姿を見たたん、教室のなかで驚愕と動揺でざわめく。宇一はただ、呆然とするしかなかった。それしかりアクションが取れなかった。幽鬼ヶ原から出たことがない彼にはそんな見た目の人間、いや人種がいるとは「データの中に」なかったのだ。

そんな空気などお構い無く、華原は淡々と転校生について紹介する。

「彼はアメリカのニューヨークからきた八ヶ峰臨太郎君だ：挨拶を。」

転校生：八ヶ峰臨太郎の姿はまるでV系と称されるゴシックパンクのようなのだ。

まず目を引くのは額を隠す程度にのびている髪の色だ。説明するのがややこしいのだが、噛み砕いていうと『右半分に艶のある黒髪』『左半分に黄色寄りの金髪』『右側面の頬にかかる位置の青い髪』『左側面の頬にかかる程度の長さの赤い髪』といったところか。いずれにせよ、中学生としてあるまじき髪色だ。

顔立ちも印象的だった。日本人の名前であるのに、鼻はすつ、と高く、色白の肌は女のように。しかし長い睫毛に縁取られた紅葉の如く赤い左目は凜とした、又は冷たく鋭さを持っていた。右目は眼帯で覆われているためだから余計に目立った。

体つきは学ランの上から分かるほどに華奢で、小柄だ。下手すると小柄な部類に入る啓司よりも小柄かもしれない。そんなミスカバグかわからないチグハグな外見が見事なバランスを保ち、妖しさと美しさを持ったオーラを醸し出している。

生徒が呆気にとられているなか、臨太郎は口を開いた。

「はじめまして：八ヶ峰臨太郎という。アメリカでは療養していたので中学校は今日が初めてだ。」

とても尊大で芝居がかった口調で、そこに中学校が初めて等という初々しさは微塵も感じられない。そして次の言葉で、生徒達は完全に閉口する事となる

「救世主^{メシア}とよべ、いいな？」

1..春雨

「…あいつ、なんなんやろな」

「またいつてる」

本日何度目か分からない問いと返答。

下校途中、田舎の住宅街の中の通学路で少年二人は問答を繰り返しながら歩いていた。転校生・八ヶ峰臨太郎は想像以上に、いやどんな個性的なクラスメートよりも個性的だった。

自分の事を《メシア》と呼べやら、自分を崇めろやら、言うことが頭のネジ数本抜けたものばかりな上に宇一が席のとなりとみるや、いきなり「下僕」呼ばわりしてきたのだ。

いくら訂正させようとしても「断る」の一点張り。怒るを通り越して呆れてしまった。

「もうなんか、夢みたいに思えるなあ…」

「俺もや。なんやねんあいつ、どこの国から来たん？」

「アメリカ」

「うそやろ…絶対…」

嘘だったら寧ろ誉めたいねえ、宇一がそう返そうとしたとき。頬に冷たいものが触れた。

「ん？」

「って、どうかしたん、宇一？」

「いや…雨かい、これは？」

頬についたものを拭う間もなく、ぽたっ、ぽたっ、と雨が降り始める。

「さっきまで晴れてなかったか？」

「とにかく雨宿りできる場所を探さないで…」

そういい、二人は走り出す。

雨はどんどん激しくなる。しかし雨宿り出来そうな場所は見つからず、ずっと一本道だ。

「ヤバい、びしょ濡れや…」

「今日は晴れだって予報なのになあ」

そう、確かに今日は晴れという予報だった。その証拠に疑いようの無いほどに晴れていたし、雲なんてなかった。天気予報め、と恨みながら雨宿りのできる場所を求めて走る。

打ち付けるような雨は弱まることなく強く降りしきり、だんだんと霧のように辺りは白く染まっていく。冷たい雨に体温と体力を奪われていく、しまいには走ることも喋ることもなくなった。

しばらくそうして歩いているうちに、妙な事に気が付く。

もうとつくに雨宿りできるような屋根が現れてもいいはずない歩いたはずだ。いくらここが田舎とはいえ、屋根ひとつ現れないのはあまりにもおかしい。

どれくらい時間がたっただろう、と宇一は鞆に隠していた携帯を取り出す。幸い濡れていない。しかし、携帯の画面を見て驚愕する。

「啓司、あの、時計…」

「宇一もか。…なんかまずくなってきたなあ？」

啓司が腕時計を見せる。その針はでたらめな方向に回転していたのだ。宇一の携帯の時計もあり得ない時間を表記していた。おかしかったのではない、異常な事態になっている！

「…あり得ない」

「せやな。…いや困ったな、腹減ったし」

「とにかく、出る方法を探さないと。」

状況は不明だがこのまま出られないのはまずい。

「宇一、どうするんや？」

と、啓司が聞いてくる。

冷静さを保て、と自分に言い聞かせながら宇一はこの状況を脱する方法を考える。

「…まずは戻ってみようか。」

せやな、と走ってきた道に戻って見ることにした。向こうもわからない中、周囲に気を配りながら歩く。しかし一向につく気配はない。進んでいるような気さえない。

しばらくお互い言葉を交わすことなく歩いていたような気がする。ふいに歩き疲れて立ち止まっていた啓司が、何かに気が付いたらしい、先を行こうとする宇一を引き留めるように呼ぶ。

「なあ…宇一、さっきから周りが全く変わらへんで？」

驚いたように宇一が立ち止まり、呟く

「…まさか。」

まさかそんなはずは。そう思いたかった。

今一度回りを見れば、啓司の言うとおりに並ぶ家は最初雨が降りだした時と何一つ変わっていない。つまり、進んでいたつもりが全く同じところに戻ってきていたということになる。

「あーあー、洒落にならんなあ、これは」

啓司が、絶句している宇一に追い付く

「……………有り得ない」

夢でも見ているのかと思い、頬をつねる。が、ねがいどおりにならないのが世の常。痛いだけだ。つねった頬をさする宇一に苦笑いしながら啓司は頭部を掻いた。

「これ以上進んでも無駄かあ、どないしょ」

少し間をおいた後、疲れた声で答える。

「…啓司、ちょっと考えさせて」

「わかった。俺あっち調べてる。」

そういい、あたりをキョロキョロとさぐりはじめる。そんな啓司を尻目に、宇一はため息をついた。考える、とは言ったものの状況すらいまいち飲み込めていなかったからだ。

一之宮宇一という少年は昔から突然の出来事に関する理解が人一倍遅い。

例を挙げれば、盤上で行うようなゲームでは滅法強いが、スポーツなどで瞬時の判断が要求される場合は本当に弱い。パニックにな

ることはないが転換がおそい、それが彼という人間性を象徴する事だった。

今までに起きた出来事を振り返り、さてどうしてこうなったのだろうと思っていた時、周囲を調べていた啓司が宇一を呼ぶ。

「なあ、宇一」

「何？」

ゆっくりと来る宇一の腕をつかんでぐいぐいと民家の外壁の前につれてくる。

「ちょっと触ってみ」

そのまま少々強引に手を外壁に触れさせる。外壁に触れている筈なのに何かがおかしい。

「よく見ても、壁があるんや」

言われて目を凝らしてみれば、確かに透明だが外壁の前に壁のようなものがある。

アクリルのような感触で、壊すことはできなさそうだが、雨は通り抜けている。…まるで生物を逃がさない為のバリケードのようだった。

「なんだいこれは…」

ますます嫌な予感がしてきた。信じられずに再度触って確かめる。壁のひんやりとした感触が余計に脳内の警鐘を鳴らす。

そのとき、揺れと共にコンクリートが割れるような音がした。啓司が音のしたほうを向き、音の主を見て呟く。

「…冗談きついわあ」

宇一も恐る恐る音のした方向を向く。

その先には夢であることを信じたくなるほどに、奇妙なものだった。

恐らく「それ」は人であったに違いない。だが、余りにも歪んだ姿をした「それ」は人として生きているのかすら怪しかった。

下半身がつぶれそうな程発達した上半身、特に肩の部分の筋肉はむき出しで、別の生物のように膨れ上がっている。まるで理科室の人体模型が大きく膨らんだようだ。風船のように膨らんだ筋肉に押し出された内臓があちこちからはみ出し、ところどころからどす黒い液体が漏れ、錆びた鉄の匂いがこちらまで伝わってくる。

顔と思わしき箇所からは裂けて広がった口から黄ばんだよだれのようなものが垂れていた。

……—まさしく「怪物」だ。

紫色をした肉塊の間から巨大な目が宇一たちを睨む。獲物を見つけた目だった。

「宇一走るぞ！」

二人が走り出すのと同時に怪物は上半身の大きさは不釣り合いな足で追いかけてくる。雨の静寂が怪物の咆哮に破られた。

コンクリートの地面を割りながら巨体が追いかけてくるのを肌を感じながら、延々と続くだろう通学路を走る。

思ったよりも怪物は早く、なかなか引き離すことが出来ない。

後ろから迫る鉄臭い香りがじりじりとせまってくるのが分かる。

「追い付かれそうだよ?!」

「嘘やろおッ!？」

巨体が透明な壁にぶつかる音が大気を振るわせる。その度に唸りのような咆哮が耳に響くこれに捕まったら殺される、その恐怖だけが足を動かす。疲労感など消え失せてしまうほどに。

ちよこまかと逃げる標的を捕まえようと、怪物の体の隙間から触手がはえて、鞭のように地面を叩く。叩くたびに地面は大きく揺れ、コンクリートの破片が飛んでくる。破片が宇一の頬をかすめ、ピリツと痛みが走る。恐らく切れたのだろう。しかし気にしている暇などない。逃げることに集中するほかない

しかし彼らの体力も無限ではない、次第に動きが鈍くなっていく

「はっ……っはぁ……っ!」

真後ろの地面が壊れる音、苦しくなる呼吸、考えられなくなる頭。次の瞬間、宇一は足を滑らせて転倒する。視界が一瞬発光したようにチカチカする。痛みを認識するまでの間、ああこれがパニックというのかと、やけに冷静に頭の片隅で考える。

「宇一!!」

啓司が慌てて振り返る。が、既に隙を逃すまいと、触手が宇一の足を絡めとり、あっという間に宙高く持ち上げていた。

宇一は外そうともがくが、かなり力があり、びくともしない。その下で怪物の口がゆっくりと開いていく。

「(…………無理か)」

万事休す。

生暖かい怪物の息がかかり、いよいよ覚悟を決めなければ…とどこか他人事のように宇一は考える。怪物が宇一を噛み千切ろうと口に運んだ。

宇一は次の瞬間を想像し、固く目を閉じた。

「…責め苦をくれてやろう」

不意に透き通るような声が響く。言い切ると同時に激しい雷鳴が鼓膜をつんざく。

いや、雷鳴だけではない、怪物の悲鳴も混ざっている。はっとして目をあげれば、怪物の脳天に何か巨大なものが刺さっていた。

赤く光る雷の十字架。

それが肉を焼き、血を蒸発させながら怪物に突き刺さっている。

急所を攻撃された怪物は、しばらくビクビクと痙攣した後、後ろにゆっくりと倒れた。

宇一は暴れる触手から振り放され、コンクリートに叩きつけられそうになる。

「わっ!？」

「世話が焼ける…」

また透き通るような声が耳元で響き、いつの間にか誰かの腕の中に受け止められている。

「…ほらよ」

乱暴な物言いながらも、そっと地面に下ろされる。お礼を言おう

と立ち上がった宇一が相手の顔を見たとき、絶句した。すぐに啓司も駆けつけてきて、助けた相手を見て驚いたような表情になる。

「お前、八ヶ峰臨太郎……！」

四色の髪、鋭い目付き。まさしく今日転校してきた八ヶ峰臨太郎本人だった。

ただ一つ違うのは、眼帯を外している事、そしてその下が白目の部分が黒く、青い虹彩であると言うことだ。まるで啓司がよんでいる漫画に出てくる人物の目のようで、驚くと同時に不思議と綺麗だなと思っていた。

「よう、馬鹿野郎。」

臨太郎は、呆然としている宇一に声をかける。

「ほれ、突っ立っていいのか？」

右腕から発生していたと思わしき、紅く発光する雷をふっ、と消す。雷が消えたと同時に、先ほどまで宇一達の何倍も大きかった怪物が、みるみるしぼんでいく。

そしてしぼみ終わった後には、上原中学校の制服をきた女だと思われる無惨な死骸になって転がっていた、赤紫に染まって。

ただ、人の形をほとんど為していないため、肉塊のようにも思える。

「人……!？」

「そうだ、人だ」

驚愕する宇一に対し、当たり前のように臨太郎は言い放ち、死骸

に近づく。胸元で十字をきると、あらぬ方向にねじれた体をもとに戻してやる。

あまりにも平然と行われる行為にあっけにとられていると、足先に柔らかな物が当たった気がして、宇一は下を向く。それは女子のものと思わしき手だった。雨に濡れてすっかり冷たく、赤紫色になったそれは嫌なほどに現実である、と主張している。

気が付けば臨太郎が何も言わずにその手を取り、遺骸の近くに置いてやる。

「：悪かったな」

罪悪感を感じても、悲しみを感じない言葉に宇一はどこか奇妙なデジャヴを感じた。そしてそんな彼の姿を見て、非常的だ、と宇一は思わざるおえなかった。

非常的な現状の真ん中にいる人物は、とてつもなく浮世離れた風貌の少年だった。

半分から左が金髪、右が緑の黒髪。右目は白眼の部分が黒く、左目は宝石のように紅い。足元には先ほどまで人間だった赤紫の死骸が黒い血の上に転がっている。

何が特別と言うわけでもない田舎町の住宅街で、化け物が殺された。

「夢でも見てるんかいな」

「残念ながら夢ではないぞ、井戸」

臨太郎はにやあ、と人を小馬鹿にしたような笑みをうかべる。啓司はカチンときたのか、隠れるように舌打ちしていた。

「さっきの化け物といい、それを一撃で消すアンタといい、頭痛い

わ」

「結構だ。言われ慣れている」

啓司は再度舌打ちをし、黙る。機会を伺ったように呆然としていた宇一が口を開く。

「転校生、君は…一体…何者なんだ？」

「私か？ そうだな、名前以外で言うならば…」

長い睫毛に縁取られた目が細められる

「私は救世主^{メシア}、偽装の輪たる世界を救済する者だ」

「メシア…？」

「そう、救世の主だ」

自己紹介の時は冗談に聞こえたメシアという言葉が、かなり大真面目な話だったのだと気が付いた。気が付けば雨は上がり霧は晴れ、死骸もどこかに消え失せていた。

「…八ヶ峰、さっきの女子は？」

「大水 閏^{うるし}、三年二組だよ。暴食の欲に負けて怪物になったようだな」

「なんでそこまで知っとんねん…てか死体は？」

「救世主だからな。あとあの死体ならあの空間に置き去りだ」

「どういう事？」

「詳しい話はまた今度にしよう、お前ら風邪引くぞ」

そういえばすっかり全身ずぶ濡れであることを思い出す。

「ほらよ、じゃあな」

突然顔にタオルが被さり、慌ててタオルを顔からとると、既に臨太郎の姿は見当たらなかった。タオルをもったまま、二人は顔を見合わせる。

「手品みたいやな」

「手品みたいだね」

「アイツは幻覚か？」

「幻覚ではないような気がするよ」

啓司が溜め息をはく。

「…一つ確かなのは、もう日が暮れそうって事やな」

夕焼けの空が、もうすぐ夜になることを告げていた。

「…ひとまず間に合ったみたいですな。」

西洋風の窓から見える映像を見て、天使は穏やかに微笑む。

「いい加減素直にならないといけないと思いますか？」

「貴様に言われる筋合いはない」

いつの間にか新たに金属のドアが現れて、それを開けながら臨太郎が入ってきた。天使は窓からの映像を見るのを止め、来客に微笑む。

「そうですか？私は素直だと自負してますが。」

「頭の回路だけだろ、機械神の使い」

おやおや、といった顔で天使は困った笑顔を浮かべる。

対して臨太郎は苛々したように睨み付ける、が、先程までの態度とはどこか違っていた。あまり変わらない笑顔で天使は続ける。

「それといつものお知らせですが、今、魔女と魔術師が入り込んでいますよ、救世主さん。」

「ふうん……となると、やはりあいつなのか？」

「さあ？そこはお楽しみです。」

翡翠の空間で二人の声ばかりが響く。何か苛立った様子で臨太郎が踵を返した。

「…さて、そろそろ帰る。」

「あら、もう帰るんですか？」

それには答えず、臨太郎はドアを開け、帰ろうとする。

「いい加減、宇一君に素直に話したほうがよいのでは？」

臨太郎が一瞬立ち止まる。しかし返答はせずに、ドアをおもいきり閉めた。ボタン、という音の後、静寂が塔にもどってくる。

塔にはまた、天使だけが立っていた。

2..開幕

結局、彼等はまだ寒さ残る四月上旬の夕暮れの中を震えながら帰宅することとなった。

先ほどの出来事でかなり体力を消耗したためか、会話もなく歩いていると、やがてY字の分かれ道に差し掛かる。啓司の家は学校からは遠い場所にあり、ここまでしか一緒に帰ることが出来ない。

「おっと、そろそろここで……じゃあな」

「うん、……また明日」

手を振り、別れを告げると啓司は右側の道へと歩いて見えなくなっていく。本当は最後まで一緒に帰りたいのだろうか。途中で立ち止まり、振り向いたりしたものの、いつの間にか姿は見えなくなっていた。

啓司を見送ると、宇一は暫くの間その道を眺めていたが、随分と日が沈んでいた事を思い出し、あわてて左側の道へと歩いていく。

橙色の光に照らされ、セピアの陰が真新しいアスファルト道路に長く伸びている。そういえばこんな鮮やかな日暮れの日、祖母に影踏みを教わった事があるなど、宇一は昔の事を思い出した。

宇一の母親は物心がつく前、とある事件の為に植物状態となってしまった。父親もその事件の時に行方不明となっている。宇一にその事件についての記憶はない。それほどまでにショックだったのか、単に幼すぎただけなのか。それすらも分からない。

ただ、人格形成に大きな影響を与えたことだけは間違いない。現にいまの一之宮宇一という少年は明らかに世俗一般の中学二年生と

比べるとどこかズレがある。子供の心なのに大人の如く安定しているのだ、不気味なまでに。

そんな型に押し詰めたような性格は事件の直後からずっとなのだから、いざどこかの家で引き取ってもらう話になったときには、親族は皆気味悪がって彼を引き取ることとはしなかった。

結局、祖母の梅子が引き取ることとなり、小学校に上がる前にこの上原町へと引っ越してくることとなった。故に宇一にとって家族とよべる人は梅子だけである。

早く帰らないと心配するかもしれない。そんなことを思いながら早足で歩く。濡れた服のせいで時々吹く風がとてもひんやりとして、思わず鳥肌が立ってしまう。

そうこうしているうちに宇一にとって見慣れた赤いペンキの屋根が見えてくる。

年季を感じるトタンの屋根、きちんと手入れが行き届いた庭の芝。周りが新築の家ばかりでより古臭さを感じるこの家が宇一が梅子と住んでいる家である。

早足で玄関までくると、ガラスの引き戸をガラガラと開けた。

「おばあちゃん、ただいま」

「ああ宇一、おかえり。随分遅かったねえ」

階段の向こうからゆっくりと白髪で小柄な老婆が歩いてくる。宇一の祖母の十日梅子^{とおかうめこ}だ。夕飯の支度をしていたのだろうか。割烹着を来ている。

梅子は宇一の格好を見るなり驚いたような声を上げる。

「どうしたんだい？ ずぶぬれじゃないか」

「うーん…… ちよっと色々あって頭から水を被ったんだよ、僕も信じられないよ」

心配性の祖母に、まさか突然異空間で雨に降られながら怪物に襲われて、奇天烈な外見の転校生に助けられましたなどと言い出せるはずがない。宇一はごまかすように苦笑いをする。……嫌に雛形に収まった笑い方なのだが。

「とにかく、風邪を引いてしまうから早く着替えな！ ついでにお風呂に入りなさい……すっかりお湯は沸かしてあるからね」

「はいはい、分かったよ」

さて、明日はどんな話をあの転校生から聞かされるのやら。宇一はどこか期待しながら荷物を置きに二階へとあがっていった。

次の日になった。昨日の出来事が嘘のように気持ちのいい太陽が青い空に上っている。ほのかに花の香りを感じながら少々ゆっくりとアスファルトの上を歩く

「宇一、おはようさん」

「……おはよう」

Y字路に差し掛かったところで啓司が宇一の肩を叩きながら声をかける。宇一もいつものように挨拶をした。そしていつものように啓司も喋り始める。

「んにしても、あの転校生何者なんやろうな？ 昨日のことといい、まるで漫画の中の人間のようにやったわあ」

「本当に漫画の中の人間かもね」

「でも漫画の中の人間やったら目の前におらへんで？」

「もしかしたら夢の中とか」

「まっさかあ……ありえへん、俺そういうの苦手なんやって」

「僕は好きだな」

「ホンマお前趣味悪いな……まあ、昔からだけど」

冗談交じりに通学路を歩く。昨日の不思議な出来事があった一本道も通っていく。

もちろん雨が降った跡も、壊れた道路も、そしてあの人だった怪物の流した黒い血も、その臭いも、どこにも残っていない。日常の一風景としての一本道の通学路は、今日もたくさんさんの学生に歩かれている。

当たり前といえば当たり前であるその光景が、今はとても平穏なものに思えてくる。また昨日の出来事がここで起きてしまうかもしれない……などと宇一はぼんやり考える。

しかしそんなことはなく、何事も無く通り、学校へとたどり着く。校門にたどりついたところで、風が強く吹き、満開の桜が乱れ舞う。その中で、彼は立っていた、漫画みたいに。

「よう、下僕と井戸」

「転校生……じゃなくってええっと」

「メシアと呼べ」

またも自己紹介の時と変わらず、臨太郎は言い放つ。もはやネタでも何でもなく真面目なのだろうか？ 宇一はとても可愛そうなのをみる目で臨太郎をみる。それが気に食わなかったのか、つかつかと宇一に歩み寄ると無言でデコピンを一発額にむかって当てた。

「いったあ……！？」

ぺちっ、という音に合わず至近距離からエアガンで撃たれたような痛みが走る。女のように細い指とは明らかに不釣り合いな痛みだった。

た。臨太郎はかなり近い距離で睨みつけてきた。

「私は至極真面目だ、何か文句でもあるのか？」

普通なら真っ赤になるような言動を大真面目にやっていたのか、宇一はそう突っ込みたくなったのだが、突然背中から岩石をぶつけられたような衝撃をうけ、地面と衝突する。昨日もこんな感じで地面とキスしたような、そんな思いが頭をよぎったが額をすりむく嫌な音と痛みでどこかに吹き飛んでしまう。

蹴り飛ばされた方向からやたらと大きな声がする。

「邪魔なんだけどお、どけつつつてるのが聞こえてないの！？」

「……ゆーちゃん、蹴り飛ばしちゃだめだよ」

痛む額を押さえつつ、立ち上がって声の主の姿を確認する。

いかにも不機嫌そうな顔で仁王立ちをしている茶髪で緑目の少女……三ツ矢夕紀と、それを止める訳でもないが、心配そうな顔をしている黒髪の少女……桐嶋咲だ。

「あの、蹴った理由が理不尽すぎると思うんだけど……」

「うるさいわね鼠頭！ 邪魔なものは邪魔なのよ！ あとそのビジュアル系、すっげーむかつくのよ！」

自己中心的すぎる理由をならべ、大声で怒鳴り散らす。夕紀を避けながら校門をくぐる他の生徒からの哀れみの目線を宇一はしっかりと感じてしまい、なんだか大事なものが傷ついたような気がした。臨太郎はなぜか黙り込んでいるが、気にせずに啓司が額の怪我を心配してに寄ってくる。

「大丈夫か？」

「大丈夫に見えたら寧ろ褒めるね」

啓司の手をかりて立ち上がろうとしたその時、臨太郎が口を開いた。

「……三ツ矢とか言ったか、貴様」

低く、怒気交じりの声。宇一的位置からは表情を伺うことは出来ないが、恐らく凄まじい顔をしていることだろう。

夕紀は苛立った様子で臨太郎を睨む。

「ええ、そうよ……それがどうしたのよ」

「駝鳥の癖に随分偉そうな口を聞くな、この無礼者」

駝鳥の単語に夕紀の顔が驚愕に染まる。何故それを知っている、といわんばかりに。それは一瞬で、次の瞬間には烈火のごとく怒り、張り裂けんばかりに怒鳴った。

「ッ、何でそれを知っているのよ!!」

齒軋りしながら臨太郎に殴りかかろうとする。が、それを制すように咲が腕をつかむ。

「駄目だよ、ゆーちゃん。遅刻しちゃうよ」

「……ちっ」

夕紀は舌打ちをすると臨太郎の横を通り抜け、早足で校舎へと向かう。咲は宇一に謝罪して彼女の後を追った。彼女達の後姿を見届けると、臨太郎は宇一の方を向く。

「下僕、私達も早く行くぞ」

「え？ ああ、うん」

さっさと先に行く臨太郎を追いかけるように、二人も校舎へと向かった。

休み時間になり、皆新しいクラスメートと楽しげに会話している。宇一もいろいろな人と会話を交わす。ちらりと臨太郎の方をみると、彼の周りには誰もいなかった。やはり自己紹介のインパクトのせいだろうか、皆近づくのをためらっているようだった。

しかし、そんな空気をものともせず近づくと少女がいた。

「やつほーメシア君、はじめましてなんだよ」

乳白色の髪、シアンの目。上梨世宇子だ。

堂々とセーラー服の上から制服ではない青いパーカーを羽織り、ポケットからは携帯のストラップが飛び出ている。そうだ、この人も転校生と同じぐらいネジが飛んでいたんだ、と宇一は内心冷や汗をかく。

周囲の視線が世宇子と臨太郎に集中する。世宇子は上機嫌な顔で臨太郎の顔を覗き込む。

「メっちゃん、おーはーよー」

「メっちゃんッ……!？」

いつの間にかついていた可愛いあだ名に驚いたのか、声が上がず。へらへらと笑いながら世宇子は臨太郎の肩をぽんぽんと叩いた。

「それじゃあゴツキーちゃんとか虹色Gちゃんとかのほうがいい？」
「……おい貴様、馬鹿にしてるのか」

周囲は普通に会話していることに安心しつつも、いつ大変なことになるかひやひやしていた。そんな気持ちを知ってか知らずか、世宇子はニコニコして続ける

「うん、面白いと思ってるし馬鹿らしいとも思ってる」

「……怒ってもいいか」

「いいよ？」

一触即発。誰もがそう思いながら今だ得体の知れない臨太郎の様子を伺う。

臨太郎は言葉を選ぶように口を歪ませながら、世宇子の瞳を覗き込む。一瞬時が止まったような、ドラマのワンシーンを切り取ったような。不思議な瞬間だった。

「……ちっ、素直すぎて怒る気もうせたわ。 あっちにいけ、目障りなんだよ白子娘」

「ぶー、いけずー！ まあいや、そういうわけで……じゃあねメッちゃん！」

世宇子が硬直している人の間をそよ風のように通り抜け、教室を出て行く。周囲は安堵感に包まれた。

「……」

しかし宇一はすれ違った時の世宇子の横顔を見てしまった。さっきまでとは別人のような、とてもとても、凍えたような顔を。休み時間はそうして過ぎていくのだった。

「それで、説明してくれる？」

放課後も随分過ぎ、蜜柑の皮のような色の光で、影は青みを含んでより黒さを増している。

宇一と啓司、そして臨太郎の三人しかない教室は、声がよく響く。宇一は、窓側を向いて座る臨太郎の背を睨みつけながら聞いた。

「……この土地には昔から能力を持った人間が集まりやすい」

「何それ、漫画みたい」

「そうだろうな……本当に漫画みたいな話だ、私も最初は疑ったよ」

だが、と続けそうになった言葉を一旦飲み込み、少しだけ間をおいてから続ける。外からはサッカー部の練習の声が聞こえてくる、静寂を際立たせるように。

「そして、この土地に出る『怪獣』があまりにも多いのだよ」

「『怪獣』やて？ なんやそれは」

聞きなれない単語だったのに、どこかで聞いた覚えがある……？

『怪獣』という単語に、宇一は妙な既視感に襲われる。それも何回も聞いて、身に刻んで覚えたかのような。その間にも臨太郎は話を進める。

「一言で言うならば傷の具現化、能力者の成れの果て、とでも言うべきか……とにかく、奴らは能力者が外因的な要素で精神の許容量をオーバーしたときに成る姿なんだよ」

「……そんな話信用できるか、ボケ、能力者もまだ信じられんいうのに」

「じゃあお前がみた『アレ』は、一体なんだったというのだ？」

その言葉に啓司は、ぐっ、と言葉に詰まる。あの悪夢のような体験を否定することは、別のものに置き換えるのは出来なかった。

臨太郎は続ける。

「信じずともいい、本当は巻き込むつもりなどなかったからな。……しかし『怪獣』側は一之宮宇一、お前を痛く気に入ってるらしい」「それは、一体どういう意味？」

答えずに、臨太郎は手を上げる。

一瞬で視界は牛乳をこぼしたように白に埋まった。

それが紅い光が拡散して目が眩んだ、と理解したときには、また耳に酷く甲高い悲鳴が突き刺さる。視界がチカチカと点滅し、パラパラ漫画のように風景がゆっくりと硬い動きで動く。元に戻るまでに少し時間がかかった。

ようやく元に戻った視界で見たものは、宇一の真横で紅く発光する槍に突き刺さった傘のように痩せ細った兎顔の女と、その槍を軽々と持ち上げている臨太郎だった。いつのまにか辺りはあの時と同じ霧が漂っている。

ジジジ、と焦げる肉の臭いがあの巨大な怪物の臭いを彷彿とさせ、思わず吐き気を催す。

「ほら、見ろ。お前を食べようとした、『怪獣^{ヒト}』だ」

嗚咽を堪える宇一になどお構いなく、槍に刺さった気味の悪い怪獣の体を、宇一の鼻先に突きつける。目を逸らそうとも、臨太郎の槍の先端よりも鋭く醒めた目線がそれから目を逸らす事を一切許さ

ない。

無言。

しばらくの空白。

やがて突き刺さった『元人間』の体が槍の放つ熱に耐え切れず、ぼとりと落ちる。霧は消えて、紅雷の槍に焦がされる血液の焦げ臭さだけが取り残される。

血液が焦がされ消えたのを待って、臨太郎は口を開く。

「一之宮宇一、この際だ、私の目的を明かそう」

息を呑むほどに、彼の真剣さが肌から、視界から、雰囲気から、槍の先から、伝わってくる。おそらく彼は本気なのだ、最初から。

「私はこの町にこれから現れる『怪獣』からお前を守りにきた」

おそらく、ふざけてなどいなかったのだ。

「これは使命だ、そしてお前にこれを拒否する権利を私は与えない」

宇一は思った。

『これが自分の時を動かしてきた救世主』なのだと。

時同じくして幽鬼ヶ原町のマンションの一室。

『八ヶ峰』と表札に書かれた一〇八号室を訪ねる少年の姿があった。

薄いゴールドのくせつ毛に、くりくりとしたグレイブルーの瞳、黒い天鵝絨で出来たよそ行きのブレザーは汚れも埃も付いておらず、綺麗に磨かれた革靴は真新しい。西洋的な目鼻立ちがよりいっそう育ちの良さを際立たせていると言える。

少年は中に部屋の主が帰ってきていると思ったようで、背伸びをしてインターホンを押す。その手には真っ白な紙箱が握られている。心なし頬に赤みが差している。

しかし、鉄の扉から現れたのは性別あやふやな四色の髪色の中学生ではなく、それより少し年上の、ピンクのお下げを垂らした丸眼鏡の少女だった。

少年は部屋を間違えたかな、と首をかしげる。

「はいはい……あれ？ 坊やはどちら様なのよ？」

いかにも外国から来ましたという顔立ちの少年に、どこか赤毛のアンを彷彿とさせる……これまた外国的な顔立ちの少女は外国語が飛び出ないかと身構える。

「僕はジャーニー・オズワルドといいます。あの、メシアのお兄ちゃんと同居している方ですか？」

「ありゃ、日本語ぺらぺらじゃん。アタシはパラポラ、ちょっとここで臨太……じゃなかったメシアのお手伝いしてんのよ」

そうなのですか、と少年・ジャーニーは胸を撫で下ろす。パラポラも日本語が喋れてよかった、と安心した様子だった。

「わかりました。ところで、今メシアのお兄ちゃんは外出中ですか？」

「んー、メシアねー……多分今学校なんじゃないかな」

それを聞くとジャーニーはしょんぼりした様子でうつむく。パラポラは何だか悪いことをしたようで、申し訳なさそうな顔をし、どうしようかと目線を泳がせる。

「（どうしようかなあ……）」

このパラポラという女、如何せん人はいいのだが『このような場面』でどうすればいいかという知恵を持っていない。読み取ることなど論外だ。

少しの間沈黙が二人の間を泳ぐ。

先に沈黙を破ったのはジャーニーの方だった。

「あの、それじゃあ部屋で待たせてもらえませんか？ ケーキせっかく買ってきたので」

そういうと、白い箱をパラポラに見えるように持ち上げ、微笑むのだった。

この時、沢山の出会いによって音も立てずに物語の終わりが始まったことに、誰も、誰も気がつかなかった。ただ二人を除いては。

3..裂天

「ジャーニー、来るんだったら一言連絡すればよかっただろう？」

珈琲を入れながら臨太郎はちよこんと座っている少年に話しかける。少年の方はテレビに映っているアニメに釘付けになりながらも、ソプラノの声で答える。

「だってー、メシアのお兄ちゃん携帯もってないじゃーん」

「もってもそんなに使わないと思ってるからな」

「それじゃ遅いよ！時代はもうY Padとか電話付きパソコンの時代だよ！？」

はいはい、と受け流しながら角砂糖を4，5個入れた珈琲をジャーニーに差し出す。よほど面白かったのか、一緒にアニメを見ていたパラポラもけけらと笑う。

「あはは、いまどきの救世主様って懐古主義なわけ？」

「悪かったな懐古主義で」

そう、決して臨太郎は機械音痴ではない。その証拠に部屋の片隅には作りかけのPCが放置されている。

実を言えばアキハバラの電気街に通うほどの、俗に言う『機械オタク』なのだが、どうやら強いこだわりがあるらしくPCは何台か所有しているが携帯は一台も所有していない。

さらに言えばこの部屋の家電もほとんど自作らしいのだが、テレ

ビといい時計といい何故かレトロな香りがするデザインばかりだ。

「パソコンはともかく、今時ニキシー管時計を自作してる中学生ってどうなのよ？」

「いいだろ、人の趣味なんだから……ほら、早くケーキ食うぞ」

そういうとその横でケーキを食べ始める。二人もお土産のケーキを食べ始めた。

暫くアニメに突っ込みなどを入れながらケーキを食べていると、ふとパラポラが気がついたようにジャーニーに話しかける。

「そういえばアンタ、用事があってきたんじゃないの？」

「あ、そうでした……あの、メシアのお兄ちゃん、今月の生活費です」

「おー、悪いな」

ジャーニーの差し出す分厚い封筒をいつもの事のように受け取ると、中に入っていた札束の数を数え始める。

パラポラは初めてみる光景に目をきよろきよろさせる。

「え、えーっと？二人はどういうご関係でして？」

「え……パラポラさんの素性も全然分からないから詳しくいえないけど、お友達だよ？」

「いやいや、とパラポラは手を振る」

「友人ってだけで普通そんなにする？」

「あはは、だから大体はそういうところってことですよ……で、パラポラさんは一体どういった経緯があって、メシアのお兄ちゃんと住んでるんですか？」

「うん？」

「だってメシアのお兄ちゃん、一人が大好きだもん」

ジャーニーの発言に言葉が詰まったようで、パラポラは目線を泳がせる。やれやれとため息をつきながら札束を数え終わった臨太郎が助け舟をだした。というよりは、一人が好きだというレットルが貼られているのが気に食わなかったのが本音かもしれない。

「そいつは私が事情を汲んで拾ってやった『魔女』だよ」

「魔女？確かに魔女みたいな帽子被ってますけど、まさかそんな冗談を」

室内であるというのにパラポラの頭に乗っかっている唾の広いつんがり帽子を指差す。仮装のような帽子に加え、ワンピースもどこか魔女を思わせる刺繍が施されている。右足にはきっちり包帯も巻かれている。しかし本当に魔女かと言われれば、誰もがすこし首をかしげるだろう。

それが分かっていたかのように、臨太郎は答えた。

「魔女だよ、正真正銘超能力でもなんでもなく『魔法』が使える魔女なんだよ」

「……えっ、本当にいたんですか！？ 古い御伽噺だけの存在では……そもそも超能力自体がまだ未知の物だって言うのに魔法だなんて！」

超能力もある意味魔法だろう、と臨太郎は心の中で突っ込む。

ジャーニーの親は近年月の石から発見された『ゼータ線』を発見した科学者だ。世間にはまだ公開されていないが、放射能が強く人体に影響を与えることで『超能力』なるものが使えるようになるという。詩的に表すならば現代のプロメテウスの火というべきか。

この星の歴史を紐解いてみると、人が異能を使うことは古代にはあったことが明らかになっている。その名残として妖怪やモンスターといった『怪物』の伝承、神々と称えられる超越者達の『神話』が今もなお残り、空想の中の事と処理されていて、信じるものものはやわずかだ。

実は現代にも異能を持つものは確認されているが、ジャーニー曰く、『科学が発展するにつれ非力さを理性的に理解した人間社会にとって、超常的な異能は黙殺すべき対象になってしまった』という。それが事実なら、超能力を作りあげてしまうゼータ線は社会に対する皮肉だろう。

そういう事を含めて、魔法は滅んだものととらえているジャーニーは呆れの混じった目でパラポラを見た。

「冗談ですよね？」

「いるも何も、アンタの目の前にいる、この私が大天才であり魔女であるパラポラ様よ！」

えへん、とパラポラは胸を逸らせる。その自信たっぷりの態度には、嘘についている様子は微塵も感じられない。

普通ならば頭のネジが外れたのではないかと疑うところだ。が、ジャーニーはまるで初めて飛行機を見た少年のように、好奇心旺盛な目でパラポラを見上げた。どうやら彼女の言うことを信用することにしたらしい。

所詮は小学生だな、と臨太郎はぼそりと呟いたが、本人の耳には届いていないらしい。

「じゃあ、やっぱり魔法はあったんですね！こんな世界にもまだ……今使えませんか？」

「えー、そのまえに私お夕飯たべたーい」

「……ケーキ食ったばかりだろ」

やれやれ、とため息をつきながら臨太郎は冷め切った珈琲の残りを飲み干した。

奇妙で絵空事のような会話を繰り広げる三人が仲良く同じベツトで寝ることになるのは、約4時間後の話である。

天地の見えない塔に、今日も天使はいた。

「『この言は初めに神と共にあった。神の申し子である嵐の者が世を創る代わりに持ち去り、彼の元で封じられていた』……。」

指で文字を確認しつつ、『嵐王叙事詩』と銘打たれた分厚い牛皮の表紙の本を音読していた天使は、背後から聞こえるジッパを開くような音がして、本を閉じる。つまり、不本意な来客である。

来客は、扉からではなく空中をカーテンのように捲って表れた。大人というよりは少年に近い小柄な体に、大きなフードのついたお世辞にも趣味がいいとは言えない、牛の目玉の飾りがじゃらじゃらと首に下がり、金の刺繍が施された邪教的な真紫のローブは、まさしく正統派の魔法使いと言えよう。

しかし魔法使いではない、来客は歴とした『魔術師』である。

「どうかいたしましたか、『心理の魔術師』さん。」

「いや、少し礼に來ただけだよ、機械仕掛け」

目深に被られたフードの奥から、深淵のごとき眼が天使を見つめる。

息が詰まりそうな目線をものともせず、『機械仕掛け』の天使はクスクス笑った。

「礼ですって？ 面白い事を言いますね……私はただ、彼女に助力して差し上げたかっただけなのですよ。」

天使の傍らには、相変わらず不思議な窓枠が浮かんでおり、その中には学校から帰る少年たちの姿が映っている。その中の一人を、天使は熱に浮かされたように見つめる。

魔術師は一笑した。

「はっ、てつきり貴様等には血も涙も亡いもんだと思っていたが、どうやら思い違いみたいだな？……酔狂な奴め」

窓枠から目を離さずに、天使は魔術師に呟く。

「酔狂な奴らしいじゃないじゃあないですか、私も、あなたも、あの子達も……この『世界』も。」

揺らめく翡翠の濁流の中、その呟きは無機質に反響した。

三ツ矢夕紀はいつもにまして機嫌が悪かった。

授業中だというのに、堂々と机に足をのせているが、誰も注意しようとはしない。それもそのはず、彼女があまりにも近寄りがたいオーラを放っているためだ。

例えるなら、般若というべきか。宇一は真面目にノートを取りながら、チラチラと夕紀を観察する。

ふてくされ、尖らせた唇はなんともいえない愛嬌がある。美少女とまでいかずとも、目もぱっちりしていて顔も可愛い方なのだから野獣にも程が有る性格さえ改善すればそれこそ勝ち組なのでは？と

滑らかな凹凸を描く横顔を見ながら考えたが、中には『ああいう性格』を好む変態もいたような気がした。

たしか誰だろう？と記憶の中を探しているときだった。

「で……だから、発音するときは舌の使い方に気をつけ……」

「せんせー」

皆静かに筆記する中、急に三ツ矢が足を直して立ち上がる。

「何ですか三ツ矢さん」

「保健室」

体調が悪くなさそうだと思ったが、どうせサボるのだろう。宇一は教科書の端を折り曲げながら夕紀を視界から外そうとした。

そこへ、つかつかと夕紀が近付いてくる。

「せんせーこいつもいいですか？」

あまりにも急な発言に宇一ははあ？と夕紀の顔を睨もうとする。しかし、睨み返してくる夕紀の目には声などなくとも訴えかけてくる、というより今にも八つ裂きにされそうな威圧感に押し黙る他なかった。

「一之宮君もいいそうなので、じゃっ」

クラスメートの奇異の視線に晒されながら、宇一は夕紀に引き摺られ、連れ出されていく。

ただ一人、他とは異なる視線を向ける人物がいたことに、宇一は気がついていなかった。

連れ出された先は人気のない第二音楽室……もとい空き教室だった。

「あの……何か用？」

「アンタ、何でじろじろ見てたのよ」

ああ、その事か。と宇一は胸を撫で下ろす。

「観察してたんだ」

「……あんたねえ」

至極当然のように言い放つ。

夕紀はその言葉に、変態を見るような目つきになる。平然と女子に向かって観察していたとなれば大体は想像通りのそういう意味になるだろう。

しかし宇一はそうではなかったらしい。すぐに訂正をいれる。

「ああ、そういう意味じゃないんだ。僕好きな子いないし」

「ふうん？」

「冗談じゃないってば、だったらここで襲ってるよ？」

「何言ってるのよ、変態!!」

「ははは、冗談冗談」

言われてみれば彼はそういう色恋沙汰には無縁という評価のある人物だ。となれば一体なにを観察していたのだろうか？その先を考えた途端、夕紀は急に背筋が寒くなるのを感じた。

（まさかあ……いや、この町だったらありえなくはないと思うけど、

妄想だといいいんだけど)

「三ツ矢さん？僕の顔に何か付いてるのかな？」

「いや。付いてるのは能面だけよ？」

「うまいこと言ってー」

面のように

想像もしたくない事が今日の前に『いる』のだ。常人とは違う秘密のある彼女とはいえ、精神はさすがに常人である。だからこそ宇一の考えていることが分からない。

「……だったらなんなのよ」

「そりゃもちろん、人間観察だけれども」

男子中学生から出てくると思えない単語がとびでてきた。夕紀は混乱を顔に出さないように唇を湿らせる。

空気が張り詰める。彼女の頭の中には、一つの単語が踊っていた。

分からない。

「は……？」

「だから、人間観察だよ。どうかしたの？」

「ど、どうかしたじゃないわよ、なにそれ……どうすんのよ」

につこりと笑う、平然と。その笑顔が余計に混乱を招く。
言葉の渦がぐるぐると夕紀の頭で回る。

分からない。気持ち悪い。

「うん、だって三ツ矢さんみたいなパターンの人間は初めてだから」

「ば、パターン？」

「だって分からなかったら認識できないだろう？」

分からない。気持ち悪い。吐き気がする・

全くもって、理解できなかった。

夕紀はあまりにも気味の悪い解答に、思わず後ずさる。後退りした足が、床に放置されていた鈴にぶつかり、軽やかな音色を立てるも、耳に入らない。

頭に宇一を嫌悪する単語が踊る中、どこか俯瞰的な部分が彼を分析しはじめる。

彼の全体像をつかむにはまだ何かが足りず、それゆえに自らの恐怖を余計煽っている。人は得体の知れないものほど恐怖を抱くのが一般的だ。だが彼を『マジヨリテイ得体の知れないもの』たらしめているものは何なのだろうか？

夕紀は現実逃避にどうでもいい事を考えてしまう自分も、気持ち悪くなってきた。

明らかに引いていることなどお構いなしに、宇一は毎日の習慣を語るかの如く、極自然に続ける。たとえば朝、学校で会った友達に昨日見たテレビの内容を伝えるような調子で。

「付け加えると今後の反応の返し方を検討するため、そして行動を理解把握するため……どうかした？」

「あ、あんたそんな事をしてどうするのよ？」

得体の知れないものを見るような表情の夕紀に、宇一は普段の型に収まった笑顔で笑う。夕紀はさらに後ずさる。

「皆、自然にしてるじゃあないか。まず相手がどういう人か観察して、どういう返し方をすればいいか、パターンを記憶する。極々、

当たり前前の事だろ？」

「はぁ!？」

「人間を人間たらしめる部分はさ、たとえ同種族であろうとも対応を変えられる部分にあるんだよ。その部分を追い求めたら何か悪いのかな？それとも夕紀さんはそんなこと考えたことなかった？」

「当たり前じゃない!」

「そっかー……」

落ち込む『ポーズ』をする宇一をみて、夕紀は『ああこいつは頭がおかしい』と漸く理解した。

そもそも授業中に呼び出したのは、むかつく転校生が妙に特別扱いしている宇一について気になっていたところ、学校の情報源たる蜘蛛手から、『一之宮宇一という奴は相当ヤバイ』と聞いていて、どういう人間か測ろうと思ったからである。今を思えばそんなことを考えた自分をぶん殴りたい。

だが今日の前にいる『モンスター』は、想像以上の『人間失格』キチガイだったのだ。

狂気というのは本来なら普通とは対局にあるべき存在だ。暴動的で、殺那的で有るべき性質。だが、彼の狂気はそのような一般的などとは違う。計算して『普通の少年』となっているのだ。温厚で優しい、様々な反応をする極普通の人間を意識的に演出する……言い換えればその皮の中身はシュレディンガーの猫。

静かな湖畔の狂気。近寄るべきではなかった、と夕紀は激しく後悔する。

絵画にも思える表情で、宇一は一步、夕紀に近づく。

「……あ、三ツ矢さん、僕も一つ聞きたいことがあるんだけど」「な、によ」

夕紀は急に追い詰められたような気がして、宇一から視線を反らす。

「何で昨日、臨太郎が『駝鳥の癖に』って言って、動揺したの？」

また一歩、近づく。

臨太郎は申し訳なさそうに視線を逸らしながら手紙を受けとる。手紙の送り主は桐島咲のようだ。丁寧に折られたピンクのメモ用紙を広げていくと、次のようなことがかかれてあった。

『不思議な転校生君、君とお話したいの。お昼やすみに旧校舎の屋上に来てくれると嬉しいな。』

「……なんだ？」

ご丁寧に可愛い猫のイラストまで描かれた手紙に、妙な不信感を抱きつつ、手紙をポケットの中にしまう。

中肉中背の先生が英文が綺麗に書かれた黒板を丁寧に消している。二人はまだ帰ってこない。午後の陽気さが顔をだすお昼時はもうすぐだった。

結局二人が戻ってこないままお昼になっていた。

他の生徒達は購買の限定メニュー『カツ焼そばパン』を求め外に出る中、臨太郎は咲に指定された旧校舎の屋上へ向かっていた。

この学校には現在はまだ使われていない旧校舎が残っている。出入り自由なのは理事長の夜鳥が『青春を謳歌しろ』という理由で開けているからだ。ちなみにそれと同じ理由で給食は無い、なぜか教育委員会も黙認しているという。

最も、普通に生徒が入るのは本棟の一階までで、屋上に上がろうというものは中々居ない。

…普通ならば、の話だが。

「おう？八ヶ峰やないか、どないしたん？」

二人分のカツ焼そばパンを片手にもった啓司に声をかけられる。誰かを待っているのか、暇そうなようだ。

「……所用でな、貴様こそどうした」

「宇一とここで飯食う約束してんねんけど、待ちぼうけくらってんや。宇一見なかった？」

「いいや、見てない。」

そうか、と項垂れる啓司にの横を通りながら、臨太郎はぼそりと呟く。

「来なかったら一緒に食ってやるよ」

「えっ？」

ポカンとしている啓司をよそに、屋上へと上がっていく。

階段を踏む度にミシッと軋む。一体築何年なのだろうか？などと考えている内に、屋上の扉までたどり着いていた。

赤茶色に錆びた扉を開けると、なま暖かい風と靡く黒い髪が見えた。

「あ、八ヶ峰君。ごめんなさい急に呼び出して」

「いや、此方こそ遅くなってすまないな……早速だが、用件を聞かうか」

チェリーのように赤い目が、優しく微笑む。

「えっとね、ゆーちゃん……三ツ矢夕紀さんの事なんだけれど」

「三ツ矢？あの女がどうかしたのか？」

青空を背に、咲は語りだす。長い黒髪が風にあおられて波うつ。

「もしかしたら薄々感づいてるのかもしれないけど、ゆーちゃんはただの人じゃないの、何だか分かる？」

「ああ、知っているさ」

真剣に語る咲を見据え、臨太郎は頷く。まるで完璧に覚えた芝居を打っているかのように。

咲はそれを聞いて安心したようだった。

「ああ、やっぱり八ヶ峰君はただの転校生じゃなかったんだね！」

「はっ、当たり前だ」

「じゃあ私のことも分かるの？」

「もちろん」

うんうん、と咲は頷き、一人納得している。

しかし、本人はいたって真面目だ。

「じゃあ本題に入るね。あのね、ゆーちゃんの事をお願いしたいことがあるの」

「お願い？」

咲はそれに深く頷くと、風に乱れる髪の毛を押さえながら続ける。

「ゆーちゃんが……」

その先は、ガラスが割れる音によってさえぎられた。

方向はおそらく宇一と夕紀がいるであろう旧校舎の方だ。臨太郎は怪獣が現れたのではと一瞬どきりとしたが、原因は別のものだった。

「ガラスが割れた……!？」

「八ヶ峰君、上！」

咲の言うとおりに上を向くと、青い空に似合わないものが空を飛んでいた。

小さな体に似合わない鷲の翼を大きくはためかせ、茶色の羽根を撒き散らしながらむちゃくちゃな軌道で飛んでいるこの学校の制服の少女。

三ツ矢夕紀だったのである。

4..舞羽

「八ヶ峰君、上!!」

上空で三ツ矢夕紀が遠目からみてもわかるほどに錯乱した様子で飛び回っている。

「三ツ矢!?! (一体何が……!?!)」

臨太郎の頭の中で瞬時に浮かんだ判断は「周りへの危害を最低限に」だった。幸い気がついていて人は少ないからパニックにはなっていない。咲も何かしらあるだろうとは踏んでいるが、この状況に対応できるとはとても思えない。

「くそ、馬鹿娘め!」

右腕に力を入れるような動作をし、能力を起動させた。

動作に意味はない、ただ自分の中でスイッチとしていただけである。起動する瞬間、全身に針を刺すような痛みが走り、軽く呻く。この瞬間が一番気持ち悪く感じるとともに脳がすっきりとする。麻薬にも、快感にも似たその痛みは新能力者特有のもので、中には痛みが癖になってところかまわず能力を使う迷惑な輩もいるという。だが臨太郎はちがう、救世主のプライドにかけてそんなことはしないと決めている。精神力の高さだけはどこかの誰か似だ。

宇一を助けたときのような紅い雷が体から迸る。わざわざこの能力を喧嘩を売ってきた相手を助けるために使うのは癪に障るが、そ

れが宇一との約束だった。

紅く熱を帯び、発光する槍をつきつけ、臨太郎は言う。

「これは使命だ、そしてお前にこれを拒否する権利を私は与えない」
強い夕日のオレンジが教室を貫いて、三人を照らしている。

今にも殺しそうな目と眼前に突きつけられた雷槍にもかかわらず、宇一は目線をそらすことはなかった。怯えることはなく、恐怖にも歓喜にも似た不思議な笑みを浮かべるとくすくすと笑いはじめる。

「う、宇一？」

とうとう壊れたのではないかと心配する啓司を余所に、宇一は楽しげだった。

「……いいよ、最高だね。やっぱりこうでない」と

お世辞にも血色がいいとは言えない唇を舌で湿らせる。何かよからぬ名案を思いついた子供の笑顔だ。啓司はその笑顔に何かいやな予感を感じざるおえない。

「オッケー、君を受け入れよう。でも、ひとつお願いがあるんだよ」
「宇一！ いいのかそんな得体の知れないやつに……！」

「あはは、変なお願いはしないよ、啓司。ただちょっとね、本当に

君がメシアだっていうならさあ……」

後ろで心配そうにしていた啓司ににこりと微笑むと、臨太郎に改めて向き直り、少しわざとらしく深呼吸をする。

「クラスの皆の命の保障、出来る？」

肩透かしを食らったように眉を顰める。

「……そんな安いことでいいのか？」

もっと別の事柄がくるかと思っていたのだ。そんな心を見透かしていたのか、宇一はくすくすと笑う。

「さっきからガンガン殺しちゃってたけれど、救うことも出来るんでしょう？ 守る事もできなきゃおかしいよね？ メ・シ・ア・さん」

挑発してきているのは明らかだった。

お前の身を守ってやろうというのになんと性格の悪い奴なのだろう、と内心愚痴る。しかし承諾しなければ素直に言うことを聞きそうにもない。順調に事が運ばなければ、この先の『出来事』に支障が出ることは明確である。そう、それこそが臨太郎が一番避けたい事態だった。

（このどうしようもない人間め……）
キチガイ

意地汚さに反吐がでて、思わず毒吐く。

今出した宇一の条件を徹底できるかどうかといわれたら答えは『NO』だ。彼らの中にも多かれ少なかれ危険因子が潜んでいること

は明白なのだ、それはたとえ宇一であったとしてもだ。

少しの間返答に詰まるが、観念したようにため息をついた。

「……わかった、ただし『人間じゃなくなった』後の保障は一切でないぞ」

「ありがとう、安心したよ」

そこに違和感を感じた啓司がちよっとまったと間にはいる。

「転校生、『人間じゃなくなった』後ってどういう意味や？」

一瞬しまったという顔をしたが、追求させまいと切り返す。

「そのままの意味だ、糸目」

「糸目やのうて井戸や!!」

きゃあきゃあと喚いている啓司はどうやら茶を濁されたことには気がついていないようだった。

——……と、変な約束をしてしまった為に、今ここで夕紀を見捨てるわけにはいかない。

約束は、絶対である。約束を守るのが救世主だと臨太郎は心に決めている。どんな些細なことでも破ってしまうぐらいなら死んでやろうと考えるほどだ。そう考えるのには理由があるが、彼は決して誰にも語ろうとはしない。

届くだろうかという不安を自分の思考から追い出し、ぎっ、と歯を食いしばる。膝を折り曲げて呼吸を整えると、バネのように高く跳躍した。ぶちぶち、と足の血管が切れる嫌な音が鼓膜に届く。

ふわりと夕紀よりも高く飛び上がり、体が地面に向かって落ちるところで暴れる彼女の腕をどうにか掴む。予想外だったのは夕紀の腕が細すぎて、掴んだときにうっかりへし折りそうになったことだ。最近は一殺すためばかりに能力を使っていたのでうまく力加減ができていない。

強く掴みすぎたのか、夕紀が蛙を潰したような色気のない悲鳴を上げた。掴んだ相手を探す目が臨太郎に向けられる。その目は血走っていて、鷹のようだった。

「離してッ！」

「落ちて着け馬鹿者が！」

夕紀が空中で暴れる度に鷲のような羽が、雪のように舞い散らばっていく。

細い腕はパニックの為か見た目以上に力があり中々取り押さえる事が出来ず、寧ろ臨太郎の顔に引っ掻き傷が増えるばかりだ。あんなに暴れる癖に女の子らしく爪は伸ばしているらしい。

本来一人を支えるための羽は、二人分の重みに耐え切れず陸の魚のようにバタバタともがく。が、漫画のように空中で静止することなど叶わず、二人の体は重力に従い落下していく。

（まずい、このしたはコンクリート……！！）

下には旧校舎の打ちっぱなしのコンクリートの屋上が無慈悲に待ち構える。このまま落ちれば、二人まとめて極楽又は煉獄送りは免れない。もしくは自分だけ辺獄送りだろうか。

受身を取る事も出来ない、一番やりたくなかったが躊躇する暇などない。咄嗟の判断で腕に紅い電撃を纏わせると地面に向ける。電撃による爆発をクッションにうまくやり過ごそうというのだ。

屋上に衝突する寸前、電撃がバルーンの如く膨張、パァン！と鼓膜を裂くような音と共に「割」れた。割れた衝撃と発生した膨大な熱により、辺りには視界を遮るほどの蒸発の煙と砂埃が漂う。

少しすると煙は風に流され、視界は晴れる。

「……いてて、ちょっと近すぎたな」

着地した周囲は炸裂した雷のためか、コンクリートの床は軽くえぐれている。臨太郎の深呼吸する音だけが響き、静寂を浮き立たせていく。臨太郎は気絶した夕紀の下敷きになりながら、空が青いなあとか、これは少しやりすぎてしまった、などとぼんやりと考えてため息をついた。遠くから足音と騒ぎ声を聞いているうちに、少し瞼が重くなってきて、意識を手放した。

はじめに咲が屋上にたどり着いた時、バトル漫画の背景と化した屋上と、似つかわしくない二人の寝息が聞こえてきたという。

「……宇一」

「はい」

「お前こういうことはしちゃアカンいうたやろ」

えへへととってつけたような謝罪に、啓司はこの日何度目かの苛立ちを覚えた。屋上に落ちた二人が眼を覚ました後、三ツ矢の証言で宇一が何かをしたをした事だけがわかり、職員室に呼び出され事情を聞かれたのだが……

「『ちょっといけないことしてました』って、その答え方はないわ！ おかげで俺まで呼び出されたやないか！」

「だって間違ってるじゃないし、ちょっと三ッ矢さんが何を隠してるのか聞こうとしたのを曲解されただけだし」

「いやいやいや、女の子にトラウマ植えつける聞き方ってなんやねん？ 三ッ矢さんめっちゃお前の事怖がってたぞ！？」

あまりにも宇一の証言が聞く人に誤解しか与えない上に、被害者の三ッ矢は返り討ちにされたことと宇一の並みならぬ気迫にすっかり怯える有様。困った挙句普段から彼の弁護士役となっていた啓司を呼び出しどうにかこうにかして誤解を解くが、そのときには空が橙色に染まり既に星すらでていた。早く自宅に帰りたいかった啓司は帰宅を阻害されてしまい、ストレスの矛先を宇一にぶつけるかの如く説教しているに至るのだ。

落下して粉々になった屋上の床だった破片を蹴り飛ばせば、カラカラと乾いた音を立てて屋上から転がり落ちて行く。誰かの頭に当たったかもしれないと啓司は思ったが別に気にも留めなかった。

「だって……」

「だってやない！」

「……ごめんなさい」

母親に叱られた様に眼を少し潤ませつつも宇一は唇を尖らせる。この日何度目かの苛立ちを覚えつつも啓司は呆れたようなため息をつき、宇一を軽く小突く。

「中学あがったら問題起こさないいうたやないか、約束破るのは関心せえへんな？」

約束、というのは二人が中学に上がる前に決めたものである。

小学生のときから宇一が問題を起こし、優等生の啓司が頭をフル回転させて庇うといったことが日常茶飯事だった為、啓司の心労は絶えなかった。中学校も同じところに通う事がわかり、流石にこのまま耐えるのは無理だといひ、決めたはいいがあまり守られることはない。なぜなら宇一に悪気はないからだ。

「ごめんごめん」

「お前約束守らんとバチ当たるで？」

あまりの白々しさに頭痛を覚える。自分は母親ではないのだから言いかけて閉口したのは、そもそも宇一の母親が彼が5歳の時に亡くなっていたことに気がついたせいだ。

彼がいまだに顔もよく覚えていない母親の死を気にしているかは分からない。が、宇一の啓司に接する態度は友人というより、信頼する家族に甘えるような、例えるなら兄に対してわざとちよっかいをだす其によく似ていた。啓司は気がついてるが、宇一にいつてもきつと無駄だろうと随分前から諦めてはいる。

このままでいいとは、啓司自身は思っていない。だが、どうにも彼の家庭事情を考えると注意する気にはなれなかった。

「……もうええ、それより先生達何にもいわんかったけど三ツ矢、あの時空飛んでたんやって？ 俺寝てて気がつかなかったけど」

「ごめん、相当強くぶん殴られてさ、覚えてないんだよ」

「相当強くぶん殴られるようなことしたもんなあ？」

「そんなことしたっけ？」

「お前、結婚する前に自分の息子使い物にならなくさせたらるか？」

そういつてサッカーボールを蹴る要領で足を下げると宇一は虫のようにすばやく後ずさりする。啓司は苛立ちを隠さずに聞かせるよ

うに舌うちをすると宇一のにやついた顔を睨んだ。しかし元々細い目のためか宇一にはさほど怖くは感じなかったらしく、「おお怖い」とからかうばかりである。

啓司は毎回本気で怒ることのできない幼馴染にどうしようもなく叩きたいと思いながらも、下げた足を戻すのだった。

「……八ヶ峰といい三ツ矢といいお前といい、今年はトラブルの予感しかせえへんなあ」

「え、僕も入ってるの？ 心外だなあ」

心外も何もない、と言おうと思った時、蝶番の軋む音が二人の耳に届く。宇一がこのとき慌てて振り向いたのはここが立ち入り禁止の場所であり先生が注意しに来たと思ったからであり、宇一がその人物を見た時ほっとしたと同時にどきりとしたのはなぜか同じクラスやよいみつきの弥生三月と弥生三日であつたからだ。

仲睦まじそうに手をつなぐ桃色という奇妙な髪色の双子は、三日は元気よく二人に挨拶をする。

「ごきげんよう井戸さん」「やっほー宇一くん」

「あら、髪を染めている疑惑のある弥生姉妹やないの、何でここへ？」

「偶々（たまたま）キミたちのどちらかが蹴った石が姉の頭に当たりました」「あたったので三日ちゃんもぶんぶんなのです！」

「あッ……」

しまった、と啓司が思つて宇一の口をふさごうとしたが宇一はお構いなしに会話をつづける。

「それなら啓司じゃないかな、さっき苛々しながら蹴ってたし。ほらそこの床の破片とか」

「成程納得致しました」「もう啓司くん、ゆうがただから人がいないとおったらおおまちがいなんだよ」

ぷくうと頬を膨らませ可愛らしげに睨んでくる三日と、冷たく溝なみち鼠ねずみでも見るような目で見つめる三月の視線に、えー、とか、あー、とかしどろもどろになりながら後頭部を掻きながら軽く頭を下げる。

「わ、悪かったって……ごめんなごめんな」

「謝れば宜しいのです。それより三日さん、他に用件がありましたよ？」「ああそうだそうだ、ねえキミたち夕紀ちゃん知らないかな？」

何故か先ほど話の話題に上がっていた夕紀の事を聞かれ、宇一は妙に不思議だとおもった。あまりにも都合がよすぎる。

「知らないけど……どうかしたの？」

あえて何か危ない事があったかのような聞き方をしたのは嫌な予感がしたせいで。そして嫌な予感というものはどうしてか的中してしまう。

「三ツ矢さんが鞆だけ残して行方不明なのです」「げたばこにくつものってたし家にもかえてないんだって」

普段はあまり通らない星辰神社の長い階段を宇一は駆け足で上っていた。普段は人もおらず穏やかだが今は不気味なほど静まり返っている。夕暮れも近い神社というのはどうしてこうも恐怖感を煽るのかと思いつつも宇一は三ツ矢夕紀を探していた。

弥生姉妹から夕紀の不自然な失踪を聞いて、啓司にお前のせいかもしれないなどと言われ渋々探しにでてきたはいいものの、先ほどから感じる不吉な予感はある始業式の帰りによく似ていて気味が悪かった。

階段を上がった先に、夕紀は宇一の方を向いて立っていた。その表情には怯えと威嚇が入り混じっている。宇一は不覚にも可愛いと顔がにやけそうになるのを押さえ、声を掛ける。

「三ツ矢さん、靴も履かないでどうしたの？」

先ほどの事もあるだろう、彼女は敵意丸出しの陰相で今にも噛み付かんばかりに歯軋りをしていた。さすがにやりすぎたなあ、と反省しながらも、彼女との距離をつめようとする。

「こないでよ！」

「皆心配していたよ？」

「こないでっていつてるじゃない！」

本当に犬のようだ。と、宇一はふと彼女の様子がおかしいことに気がついた。さきほどから何故か背中を見せようとしなかったのだ。こちらが殺しかかろうとしているならまだしも、きてほしくないのならこのままさっさと逃げてしまえばいい。だが何故か後ずさるばかりで逃げようとしないう。というより、背中で何かが動いているような気がする。

妙に背中を隠す夕紀を不審に思った宇一が近づこうとすると、足元から爆竹のような爆発が起きる。思わず身を引いて足元を見れば明らかに人間技ではない、きれいな半円状にえぐれた跡がぷすぷすと煙をあげていた。一体いつ爆発するようなものが石畳にあったのだろうか？

「あの、これはどういうこと……」

「そ、それ以上近づいたら殺すわよ、脅しじゃないわ!」

余程隠したいのだろうか、鬼気迫る表情で睨んでくる。しかし、見えてしまっている。おおよそ人間にあってはならないものが。脳震盪の間際みえた翼が。

「ごめん、その羽隠しきれてないよ」

「……!!」

顔がわずかに強張る。

「あの時窓から飛び出したのは、僕から逃げようとしたから、その羽をつかって逃げようとしたから……でしょう?」

それが君にとっては不都合だったんだね?とあくまでも紳士的に尋ねる。怪獣の件もある、ここで不用意に彼女を刺激したら何が起こるかかわからない。宇一は身構えながら彼女の反応を観察していた。実を言えば、あの時気絶などしておらず夕紀が錯乱して飛びたつところをばっちりと見ていた。服を突き破り大きな羽が出てくる所も、それが鳥のように動いて彼女が飛びたっていたところも。でも決して嘘ではない、次の瞬間には気絶していたからだ。

沈黙し、棒立ちだった彼女は羽を隠すこともせずに宇一をじっとみつめている。猛禽類の羽は健康的で細い彼女の体には不釣り合いなほど大きく荒々しい。まるで天使のようだと思った、人を火で焼きつくす裁きの天使の羽に。

こんな羽が彼女の意味でたしかにあの時、宇一が頭をぶつけたときに、夕紀が窓から飛び立った時に動いたのだとおもうと、小説を読んでいるような気分になる。

「あの、信じてくれないかもしれないけど」

彼女が口をひらく。これが、宇一が『三度目』に遭遇する怪奇だった。

「他の子に言わないでね、私、本当は」

「天狗なのよ」

「あー……いてて、全く話の分かる先生で助かったよ」

現在八ヶ峰臨太郎宅。自称メシアの少年は随分と腰を痛そうにさすりながらソファーに寝転がっていた。能力を無理やり体に叩き込んだ反動で全身筋肉痛、ところどころ血管は切れたのに加え、夕紀をかばうように落ちたせいで背中や腰を強打したのは、いくらクッションを作って緩和したと言えどさすがにこたえたようで、つい三十分前から寝転がったきり動こうとしない。

キッチンで何に使うのか、タイムやレモングラスなどのハーブをトマト色のやかんに突っ込んで煮ていたパラポラは、そんなみっともないメシアにあきれたようなため息を飛ばす。

「救世主ともあろう人がそーんなんでよろしいのかしらね？」

「黙れ変態変人ケミカルブレイン女が。私だって元は人間だ」

「なによ、今は人間じゃないっていうの？」

「さあどうだか……それはそうと、沸騰してるぞ」

「あら、ありがとう墮落ニートメサイア様」

憎まれ口を叩きつつもお礼をいい、コンロの火を止めると、ヒューとのど笛を鳴らすやかんの蓋をあけて近くにおいてあった乾燥ラベンダーを束ごと突っ込む。部屋には少し鼻がとおり過ぎるぐらいのハーブの香りが漂って、臨太郎を不愉快にさせた。

「で、お前は何をつくっているんだ」

「あんたのために薬つくってあげてるんでしょ、お察しなさいな」

と、自身満々なのだが生憎臨太郎はパラポラをつくる薬が大の苦手だ。今年の一月頃、この町に転居してきた直後に珍しく風邪を引き、飲まされたことがあったのだが、どういうわけか明らかな住居用洗剤の味ときつすぎるハーブ臭だけがして治る気がしない。一応は効くのだが。

伝承や寓話でよくある蛙やら髪の毛やらを入れてないだけまだマシだが、恐らく彼女には人間としての味覚と色覚がそろっていないのだろう。まずそうとパラポラに聞こえない程度に漏らしたとき、玄関のチャイムが鳴る。

「ごめーん、ジャーニー君出てくれない？」

「はーい！」

テレビの前で、今一大ムーブメントを巻き起こしているという格闘少女アニメ、『マジカル＊ブレインガール』の録画——録画したのは他でもない八ヶ峰臨太郎であり、彼の今一番はまっているアニメである——を見ていたジャーニーは、一時停止ボタンを押すとペ

たぺたと歩きながら玄関へ向かう。

爪先立ちをしながらドアノブにもたれかかるように押し開けると、桃色の髪の二人組がジャーニーの顔をのぞきこむ。どうやら予想した人物と違う人が出たことに驚いたらしい。

「あの、ここ八ヶ峰君のおへやであつてるよね？」

「はいそうですけど、どちらさまですか？」

「私達は八ヶ峰臨太郎さんの級友の弥生三月と申します」「弥生三日です」

二人はお辞儀をし、臨太郎はいないだろうかと尋ねる。もう暗くなり始めているのに、と不思議におもいながらジャーニーはおそろくソファアで体を休めているであろう部屋の主を呼ぶ。

「メシアお兄ちゃん、お客さんだよー！」

「わかった……いたっ！」

腰をさすりながら臨太郎が玄関までくると、あまり覚えのない二人に怪訝な顔をする。とはいえ、多少(?)個性豊かなクラスメートの中でも外見が目立っているからか、顔は覚えていたようだ。

「何の用だ、えっと……弥生だったな」

「そうだよ、臨太郎くん、夕紀ちゃん来てないかな？」

「はあ? あいつがここに来るわけがないだろう。あとメシアって呼べと言っているだろう」

律儀に訂正しながらも否定されると、だよねえ、と三日が困った顔をしながら三月と顔を合わせる。厄介事の臭いがする、と思いいながらもいかにも事情を聞いてくださいと言わんばかりの空気に、二人に尋ねざるおえなかった。

「あいつがどうかしたのか」

「三ツ矢夕紀さんが学校から急に姿を消してしましまして、此方に伺っていないかと尋ねた次第です」

「……ふーん」

玄関にまでパラポラの煮ているハーブの香りが漂ってきて、前に飲まされた時の嘔吐感がこみ上げてくる。早くこの部屋から離れたいな、と臨太郎は考えた。ちょうどいい都合も目の前においてあることだから。

「その人探し、私も手伝おうではないか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9969y/>

放課後メサイア

2011年12月3日02時53分発行